

# 明治美人伝

長谷川時雨

青空文庫



空の麗し<sup>うるわ</sup>さ、地の美し<sup>うるわ</sup>さ、万象の妙<sup>たえ</sup>なる中に、あまりにいみじき人間美は永遠を誓えぬだけに、脆<sup>もろ</sup>き命に激<sup>はげ</sup>しき情熱の魂をこめて、たとえしもない刹那<sup>せつな</sup>の美を感じさせる。

美は一切の道徳<sup>どうとく</sup>規矩<sup>きく</sup>を超越して、ひとり誇<sup>ほこ</sup>らかに生きる力を許されている。古来美女たちのその実際生活が、当時の人々からいかに罪<sup>さげ</sup>され、蔑<sup>さげ</sup>すまれ、下<sup>おと</sup>しめられたとしても、その事實は、すこしも彼女たちの個性的価値<sup>ねうち</sup>を抹<sup>まっ</sup>殺<sup>さつ</sup>する事は出来なかつた。かえって伝説化された彼女らの面影は、永劫<sup>えいごう</sup>にわたって人間生

活に夢と詩とを寄与きよしている。

小なき夢想家であり、美の探求たんきゆうしや者であるわたしは、古今の美女のおもばせを慕つてもろもろの書史ふみから、語草かたりぐさから、途上の邂逅かいこうからまで、かずかずの女人をさがしいだし、その女ひとたちの生涯へんえいの片影しるを記しとどめ、折にふれて世の人に、紹介することを忘れなかつた。美しき彼女たちの（小伝）は幾つかの巻となつて世の中に読まれている。

そしてわたしの美女に対する細こまかしい観賞、きりきざんだ小論はそうした書にしるしておいた。ここには総論的な観方みかたで現代女性を生んだ母の「明治美人」を記して見よう。

それに先だつて、わたしは此処ここにすこしばかり、現代女性の美の特質を幾分書いて見なければならぬ。それはあまりに急激に、世の中の美人観が変つたからである。古来、各時期に、特殊な美人型があるのはいうまでもないが、「現代は驚異である」とある人がいったように、美人に対してもまたそういうことがいえる。

現代では度外どはずれということや、突飛とつぴということが辞典から取消されて、どんなこともあたり前のこととなつてしまった。実に

「驚異」横行の時代であり、爆発の時代である。各自の心のうちには、空さえ飛び得るといふ自信をもちもする。まして最近、檻おりを蹴破り、桎しっこく梏こくをかなぐりすてた女性は、当然ある昂たかぶりを胸に抱く、そこで古い意味の（調和）古い意味の（諧音）それらの

一切は考えなくともよいとされ、現代の女性は（不調和）のうちに調和を示し、音楽を夾雑音のうちに聴くことを得意とする。女性の胸に燃えつつある自由思想は、各階級を通じて（化粧）（服装）（装身）という方面の伝統を蹴り去り、外形的に（破壊）と（解放）とを宣言した。ととの調わない複雑、出来そくなつた変化、メチャメチャな混乱——いかにも時代にふさわしい異色を示している。

時代精神の中樞は自由である。束縛は敵であり跳躍は味方である。各自の気分によつて女性は、おつくりをしだした。美の形式はあらゆる種類のものが認識される。

黒狐の毛皮の、はくせいひょうほん剥製標本のような獣の顔が紋服の上にあつ

ても、その不調和を何なんびと人も怪しまない。十年前、メエテルリンク夫人の豹ひょうの外がい套とうは、仏蘭西フランスにおいても、亜米利加アメリカにおいても珍重されたといわれるが、現代の日本においては、氣分的想像の上ですでにそんなものをば通り越してしまっている。

その奔放な心持ちは、いまや、行きつくところを知らずに混こんと沌とんとしている。けれども、この思い切った突飛とつびの時代粧をわたしは愛し尊敬する。なぜならば進化はいつも混沌をへなければならぬし、改革の第一歩は勇氣に根ざすほかはない。いかに馴じゆん化かされた美でも、古くなり氣が抜けては、生氣に充ちみちた時代の氣分と合わなくなってしまう。混沌たる中から新様式の美の発見をしなければならぬ。そこに新日本の女性美が表現される

のであるから——

なごやかな、そして湿しめやかな、嚙かみしめた味をよろこぶ追懐的情緒は、かなり急進論者のように見えるわたしを、また時代とは逆行させもするが、過激な生活は動的の美を欲求させ、現代の女性美は現代の美の標準の方向を表示しているともいえるし、現代の人間が一般的に、どんな生き方を欲しているかという問題をも、痛切に表現しているともいえる。で、その時代を醸かもした、前期の美人観をといえは、一口に、明治の初期は、美人もまた英雄的であつたともいえるし、現今のように一般的の——おしなべて美女に見える——そうしたのではなかつた。「とても昔なら醜しこめ女とよ



ばれるのだが、当世では美人なのか。」と、今日の目をもたない、  
 古い美人観にとらわれているものは歎声を発するが、徳川末期と  
 明治期とは、美人の標準の度があまりかけはなれてはいなかった。  
 無論明治期にはいつて、丸顔がよろこばれてきていた。「色白  
 の丸ポチャ」という言葉も出来た。女の眼には鈴を張れという前  
 代からの言いならわしが、力強く表現されてきている。けれど、  
 やはり瓜実顔うりざねがおの下ぶくれしも——鶏卵形が尊重され、角かくばったのや、  
 額ひたいの出たのや、顎あごの突出たのをも異国情緒——個性美の現われと  
 悦ぶようなことはなかった。

瓜実顔は勿論徳川期から美人の標型になっていた。その点で明  
 治期は美人の型を破り、革命をなし遂とげたとはいえない。そして

瓜実顔は上流貴人の相である。その点で明治美人は伝統的なものであり、やはり因習にとらわれていたともいえる。維新の政変はお百姓の出世しゅつせどき時ときというようなことを、都会に生れたものは口にしていたが、「お百姓の出世」とは、幕府直参じきさんでない、地方侍の出世という意味で、決して今日のように民衆の時代ではなかつた。美人の型もおのずから法則があつた。

とはいえ、徳川三百年の時世にも、美人は必ずしも同じ型とはいえない。浮世絵の名手が描き残したのを見てもその推移は知れる。はるのぶ春信、しゅんしょう春章、うたまろ歌麿、くにさだ国貞と、豊満な肉体、丸顔から、すらりとした姿、脚と腕の肉附きから腰の丸味——ふじびたい富士額——じみ触觉からいえば柔らかい慈味のしたたる味から、幕末へ来て

は齒あたりのある苦みを含んだものになっている。多少骨つぽく  
なつて、頭髮などもさらりと粗あらつぽい感じがする。羽二重や、統ぬめ  
や、芦あしで手模様や匹田鹿ひつたがの子の手ざわりではなく、ゴリゴリする浜  
ちりめん、透綾すきや、または浴衣ゆかたの感触となつた。しかしこれは主おもに  
江戸の芸術であり、風俗である。京阪けいはん移殖いしよくの美人型が、漸ようやく、  
江戸根生ねおいの個性あるものとなつたのだつた。錦絵、芝居から見  
ても、洗いだしの木目もくめをこのんだような、江戸系の素質を磨みがき出そ  
うとした文化、文政以後の好みといえもする。——その間に、明  
治中期には、中京美人の輸入が花柳界を風靡ふうびした——が、あらず  
われないのは時代の風潮で、そうしたかたむきは、京都を主な生  
産地としている内裏だいりびな雛にすら、顔立ち体つきの変遷が見られる。

内裏雛の顔が尖<sup>とが</sup>つて、神経質なものになったのは、明治の末大正の初めが甚<sup>はなはだ</sup>しかった。

上古の美人は多く上流の人のみが伝えられている。稀<sup>まれ</sup>には国々の麗<sup>うる</sup>わしき少女<sup>おとめ</sup>を、花のように笑<sup>え</sup>めるおもわ、月の光りのように照<sup>おもて</sup>れる面<sup>おもて</sup>とうたつて、肌の艶<sup>つや</sup>極めてうるわしく、額<sup>うれい</sup>広く、愁<sup>うれい</sup>の影<sup>かげ</sup>などは露<sup>つゆ</sup>ほどもなく、輝<sup>あかり</sup>きわたりたる面<sup>おもて</sup>差<sup>さ</sup>晴<sup>は</sup>々として、眼<sup>まぶた</sup>瞼<sup>たぶ</sup>重<sup>かさ</sup>げに、眦<sup>まなじり</sup>長<sup>なが</sup>く、ふくよかな匂<sup>にお</sup>わしき頬<sup>ほほ</sup>、鼻<sup>はな</sup>は大きからず高<sup>たか</sup>すぎもせぬ柔<sup>な</sup>らか味<sup>あじ</sup>を持ち、いかにものどやかに品<sup>しん</sup>位<sup>い</sup>がある。光<sup>こう</sup>明<sup>めい</sup>皇<sup>こう</sup>后<sup>こう</sup>の御<sup>ご</sup>顔<sup>がん</sup>をうつし奉<sup>たてまつ</sup>つたという仏<sup>ぶつ</sup>像<sup>ざう</sup>や、その他のものにも当<sup>あ</sup>時の美<sup>み</sup>女<sup>にょ</sup>の面<sup>めん</sup>影<sup>えい</sup>をうかがう事<sup>こと</sup>が出来る。上<sup>じやう</sup>野<sup>よ</sup>博<sup>はく</sup>物<sup>ぶつ</sup>館<sup>かん</sup>にある吉<sup>きち</sup>祥<sup>しやう</sup>

うてんによ  
 天女の像、いずも出雲大社の奇稲田姫くしいなだひめの像などの貌容がんように見ても知られる。

平安朝になつては美人の形容が「あかかがちのように麗れいれい々しく」と讚えられている。「あかかがち」とは赤たんばほおずき酸漿みの實の古い名、当時の美女はほおずきのように丸く、赤く、艶やかであつたらしくも考えられる。赤いといつても色いろつや艶うらうるわしく、匂うようなのを言つたのであろう。古い絵巻などに見ても、骨の細い、肉つきのふつくりとした、額は広く、頬も豊かに、丸々とした顔で、すこし首の短いのが描いてある。そのころは、髪の毛の長いのと、涙の多いのを女の命としてでもいたように、物語などにも姿よりは髪かみの美しさが多くかかれ、敏感な涙が多くかかれてあ

るが、徳川期の末の江戸女のように、意気地と張りを命にして、張詰めた溜<sup>ためなみだ</sup>涙をぼろぼろこぼすのと違つて、細い、きれの長い、情のある眦<sup>まなじり</sup>をうるませ、几帳<sup>きちよう</sup>のかけにしとすと、春雨の降るように泣きぬれ、打かこちた姿である。

鎌倉時代から室町の頃にかけては、前期の女性を緋桜<sup>ひざくら</sup>、または藤の花にたとへれば、梅の芳<sup>かんば</sup>しさと、山桜の、無情を觀じた風<sup>ふう</sup>情<sup>ぜい</sup>を見出すことが出来る。生に対する深き執着と、諦<sup>あきら</sup>めとを持たせられた美女たちは、前代の女性ほど華やかに、湿やかな趣きはかけても、寂<sup>さび</sup>と渋<sup>しぶ</sup>味<sup>あじ</sup>が添うたといえもする。この期の女性の、無情感と諦めこそ、女性には実に一大事となつたのだが、美人觀には記す必要もなからう。

徳川期に至つては、元禄の美人と文化以後のとはまるで好み  
 違つてゐる。しかしここに来て、くつきりと目立つのは、上流の  
 貴女ばかりが目立っていたのから、すべてが平民的になつた事  
 ある。ひとつには当時の上流と目される大名の奥方や、姫君など  
 は、籠かごの鳥同様に檻かんきん禁してしまつたので、勢い下々しもじもの女の気  
 焰えんが高くなつたわけである。湯女ゆな、遊女ゆうじよ、掛茶屋ちやくみおんなの茶酌女  
 等は、公然と多くの人に接するから、美貌はすぐと拡まつた。

当世貌とうせいがおは少しく丸く、色は薄模様にして、面道具めんどうぐの四つ  
 不足なく揃へて、目は細きを好まず、眉厚まゆく鼻の間せわしか  
 らずして次第に高く、口小さく、齒並はなみあら〜として白く、  
 耳長みあつて縁浅く、身を離れて根まで見えすき、額ひたいぎはわ

ざとならず自然に生えとまり、首筋たちのびて、後おくれなしの後髪、手の指はたよわく、長みあつて爪つめ薄く、足は八文もん三分ぶの定め、親指そ反つて裏すきて、胸間常の人より長く、腰しまりて肉ししおき置たくましからず、尻はゆたかに、物ごし衣装つきよく、姿の位そなはり、心こころ立ただおとなしく、女に定まりし芸よろずすぐれて万いに賤いやしからず、身にほくろひとつもなき——と井原さい西いかく鶴はその著『一代女』で所望している。

明治期の美女は感じからいって、西鶴の注文よりはずっと粗あらつぽくザラになった（身にほくろ一つもなき）というに反して、西洋風に額にほくろを描くものさえ出来た。

徳川期では、吉原よしわらや島原しまばらの廓くるわが社交場であり、遊女が、上



流の風俗をまねて更に派手やかであり、そして、女としての教養もあつて、その代表者たちにより、時代の女として見られた。それに次いで、明治期は、芸者美が代表していたといえる。貴婦人の社交もひろ拡まり、女子擡頭たいとうの氣運は盛んになつたとはいへ、そしてまた、女学生スタイルが、追々に花柳界人の跳梁ちようりようをくちく駆逐したとはいへ、それは、大正の今日にかかるかけはし棧であつて、明治年間ほど芸妓の跋扈ぼっこしたことはあるまい。恰度ちやうど前代の社交が吉原であつたように、明治の政府と政商との会合は多く新橋、赤坂辺の、花柳明暗かりゆうめいあんの地に集まつたからでもあるろう。芸妓の鼻息はあらくなつて、真面目まじめな子女は眼下に見下され、要路の顯官けんかん貴紳しん、紳商は友達のように見なされた。そして誰氏の夫人、彼氏の

夫人、歴々たる人々の正夫人が芸妓上りであつて、遠き昔はいうまでもなく、昨日まで幕府の役人では小旗本といえど、そうした身柄のものは正夫人とは許されなかつたのに、一躍して、雲井に近きあたりまで出入することの出来る立身出世——玉の輿たまこしの風潮にさそわれて、家憲かけん厳しかつた家までが、下々しもしもでは一種の見得みえのようにそうした家業柄の者を、いきなり家庭の主婦として得々としていた——これは中堅家庭の道德の乱れた源となつた。

しかしながら、それは国事にこと茂くて、家事をかえり見る暇いとまのすけなかつた人や、それほどまでに榮達して、世の重き人となるうとは思わなかつた人の、軽率な、というより、止むやを得ぬ情話からなどが絡んでそうなつたのを——しかもその美妓たちには、革

進者を援ける気概のあつた勝れた婦人も多かつたのだ——世人は改革者の人物を欽仰して、それらのことまで目標とし、師表とした誤りである。ともあれ、前時代の余波をうけて、堅気な子女は深窓を出ず、几帳をかなぐつて、世の中に飛出したものもなかつたので、勢い明治初年から中頃までは、そうした階級の女の跳躍にまかせるより外はなかつた。

ここに燦として輝くのは、旭日に映る白菊の、清香芳ばしき明治大帝の皇后宮、美子陛下のあれせられたことである。

陛下は稀に見る美人でおわしました。明眸皓齒とはまさにこの君の御事と思わせられた。いみじき御才学は、包ませられても、

御詠出の御歌によつて洩れ承もうけたまわる事が出来た。

明治聖帝が日本の国土の煌かがやきの権化ごんげでおわしますならば、桜さく国くにの女人の精華は、この后であらせられた。大日輪の光りの中から聖帝がお生まれになつたのならば、天地馥郁てんちふくいくとして、花の咲きみちこぼれたる匂いの葳しべのうちに、麗しきこの女君めぎみは御誕生なされたのである。明治の御代に生れたわたしは、何時もそれをほこりにしている。一天万乗ばんじようの大君の、御座ぎよざの側かたわらにこの后がおわしましてこそ、日の本は天照大御神の末で、東海貴姫国とよばれ、八面玲瓏れいろうの玉芙蓉峰ぎよくふようほうを持ち、桜咲く旭日あさひの煌くく国とよぶにふさわしく、『竹取物語』などの生れるのもことわりと思ふのであつた。

我等女性が忘れてならないこの后からの賜物たまものは、長い間の習わしで、女性の心が盲目であつたのに目を開かせ、心の眠つていたものに夢をさまさせ、女というもの自身のもつ美果を、自ら耕し養えとの御教えと、美術、文芸を、かくまで盛んに導かせたまひしおんことである。それは廢すたれたるを起し、新しきを招かれたそればかりでなく、音楽や芸術のたぐいにとりてばかりでなく、すべての文教のために、忘れてならないお方でおわしました。主上にはよき后でおわし、国民にはめでたき国の宝と、思いあげる御方であらせられた。

この、後の宮の御側には、平安朝の後こうきゆう宮にもおとらぬ才さいえ媛んが多く集められた。五人の少女を選んで海外留学におつかわ

しになつたことや、十六歳で見出された下田歌子女史しもだうたこ、岸田俊子きしだとしこ  
 (湘煙しょうえん)女史があり、女学の道を広めさせられた思召おぼしめしは、  
 やがて女子に稀な天才が現われるときになつて、御余徳おんよとくがしの  
 ばれることであらう。一条左大臣の御娘である。

## 二

わたしは此処に、代表的明治美人の幾人かの名を記しるそう。そし  
 てその中からまた幾人かを選んで、短かい伝を記そう。上流では  
 北白川宮大妃富子殿下、故有ありすがわのみや栖川宮妃慰子殿下、新樹しんじゆの局つぼね、  
 高倉典侍、現岩倉侯爵の祖母君、故西郷さいごう従道つぐみち侯の夫人、現前

田侯爵母堂、近衛公爵の故母君、おおくま大隈侯爵夫人綾子、戸田伯爵夫人極子を数えることが出来る。東伏見宮周子殿下、やまうちさだこ山内禎子夫人、有馬貞子夫人、まえだようこ前田様子夫人、九条武子夫人、いとうあきこ伊藤燐子夫人、小笠原貞子夫人、寺島鏡子夫人、稲垣栄子夫人、岩倉桜子夫人、古川富士子夫人の多くは、大正期に語る人で、明治の過去には名をつらねるだけであろうと思われる。

山県公の前夫人は公の恋妻であつたが二十有余年のえんおう鴛鴦の夢破れ、公は片羽鳥かたわどりとなつた。その後、現今の貞子夫人がそばちこ側近う仕えるようになった。幾度か正夫人になるといううわさ噂もあつたが、彼女は卑下して自ら夫人とならぬのだともいうが、物堅い公爵が許さず、一門にも許さぬものがあつて、そのままになつていと

いう事である。表面はともあれ、故桂侯などは正夫人なみにあつかわれたという、その余の輩ともからにいたつてはいうまでもない事であろう。すれば事實は公爵夫人貞子なのである。

貞子夫人の姉たき子は紳商益田ますだたかし孝男爵の側室である。益田氏と山県氏とは単に茶事ちやじばかりの朋友ともではない。その関係を知つてゐるものは、彼女たち姉妹のことを、もちつもたれつの仲であるといつた。相州板橋にある山県公の古稀庵こきあんと、となりあう益田氏の別荘とはその密接な間柄をものがたつてゐる。

姉のたき子は瘦やせて眼の大きい女である。妹の貞子は色白な謹つつましやかな人柄である。今日の時世に、維新の元勳元帥の輝きを額にかざし、官僚式に風靡し、大御所公おおごしよの尊号さえ附けられて



いる、大勲位公爵を夫とする貞子夫人の生立ちは、あわれにもいたましい心の疵きずがある。彼女たち姉妹がまだ十二、三のころ、彼女たちの父は、日本橋芸妓歌吉と心中をして死んだ。そういう暗い影は、どんなに無垢むくな娘心をいためたであろう。子を捨ててまで、それもかなりに大きくなつた娘たちを残して、一家の主人が心中する——近松翁の「天てんの網あみ島しま」は昔の語りぐさではなく、彼女たちにはまざまざと眼に見せられた父の死方である。明治十六年の夏、山王さんのう——麴町日枝神社の大祭のおりのことであつた。芸妓歌吉は、日本橋の芸妓たちと一緒に手古舞てこまいに出た、その姿をうみの男の子で、鍛冶屋かじやに奉公にやつてあるのを呼んで見物させて、よそながら別れをかわした上、檜物町ひものちようの、我家の奥蔵の三

階へ、彼女たちの父親を呼んで、刃物で心中したのであった。

彼女たちは後に、芝居でする「天の網島」を見てどんな気持ちに打たれたであろうか、紙屋治兵衛かみやじへえは他人の親でなく、浄瑠璃でなく、我親そのままなのである。京橋八官町の唐物屋とうぶつや吉田吉兵衛なのである。

彼女たちの父は入婿いりむこであった。母は気強きんごうな女であった。また芸妓歌吉の母親や妹も気の強い気質であった。その間に立つて、気の弱い男女は、互いに可愛い子供を残して身を亡ほろぼしたのである。其処に人世の暗いものと、心の葛藤かつとうとがなければならぬ。結びついて絡からまった、ついには身を殺されなければならぬ悲劇の要素があつたに違いない。

その当時の新聞記事によると、歌吉の母親は、あいて相手の男の遺子たちに向つて、お前方も成長おおきくなるが、間違つてもこんな真似をしてはいけないという意味を言聞かして、涙いつてき一滴こぼさなかつたのは、氣丈な婆さんだと書いてあつた。その折、言聞かされてうなず頷いていた少女が、たき子と貞子の姉妹で、彼女の母親は、彼女たちの父親を死に誘つた、憎みと怨みうらをもたなければならぬであろうげいしや妓女に、この姉きようだい妹をした。彼女たちは直すぐに新橋へ現れた。

複雑しんりな心裡の解剖はやめよう。ともあれ彼女たちは幸運を贏かち得たのである。情も恋もあろう若き身が、あの老侯爵かしずに侍かいて三十年、いたずらに青春は過ぎてしまつたのである。老公爵百年の

後の彼女の感慨はどんなであろう。夫を芸妓に心中されてしまった彼女の母親は、新橋に吉田家という芸妓屋を出していた。そして後の夫は講談師伯知はくちである。夫には、日本帝国を背負っている自負の大勲位公爵を持ち、義父に講談師伯知を持った貞子の運命は、明治期においても数奇なる美女の一人といわなければなるまい。

その他 淑しゆく徳とくの 高い故伊藤公爵の夫人梅子も前身は馬関ばかんの芸

妓小梅である。山本権兵衛伯夫人は品川の妓楼に身を沈めた女である。桂公爵夫人加奈子も名古屋の旗亭きてい香雪軒かせつけんの養女である。

伯爵黒田清輝画伯夫人も柳橋でならした美人である。大倉喜八郎夫人は吉原の引手茶屋の養女ということである。銅山王古川虎之

助氏母堂は、柳橋でならした小清さんである。

横浜の茂木<sup>もぎ</sup>、生糸の茂木と派手にその名がきこえていた、生糸王野沢屋の店の没落は、七十四銀行の取付け騒ぎと共にまだ世人の耳に新らしいことであろう。その茂木氏の繁栄をなさせ、またその繁栄を没落させたかげに、当代の若主人の祖母おちようのある事を知る物はすけない。彼女は江戸が東京になつて間もない赤坂で、常磐津<sup>ときわづ</sup>の三味線をとつて、師匠とも町芸者ともつかずに出たが、思わしくなかつたので、当時開港場として盛んな人気の集つた、金づかいのあらひ横浜へ、みよりの琴の師匠をたよつて来て芸者となつた伝<sup>でん</sup>法<sup>ぽう</sup>な、氣つぷのよい、江戸育ちの齒<sup>は</sup>ぎれのよいのが、大きな運を賭<sup>かけ</sup>てかかる投機的の人心に合つて、彼女はめ

きめきと売り出した。その折、彼女の野心を満足させたのは、横浜と共に太ってゆく資産家野沢屋の旦那をつかまえたことであつた。

野沢屋茂木氏には糟糠そうこうの妻があつた。彼女は遊女上りでこそあるが、一心になつて夫を助け家を富とました大切な妻であつた。その他に野沢屋には総番頭支配人に、生糸店として野沢屋の名をなさせた大功のある人物があつた。その二人のために、さすがに溺おぼれた主人も彼女をすぐに家に入れなかつた。長い年月を彼女は外妾として暮さなければならなかつた。

茂木氏夫妻には実子がなかつた。夫婦の姪めいと甥おいを呼び寄せ、め

あわせて二代目とした。ところが外妻の方には子が出来た。女であつたので後に養子をしたが、現代の惣兵衛氏の親たちで、彼女が野沢屋の大奥さんとして、出来るだけの栄華にふける種をおろしたのであつた。

過日あの没落騒動ぼつらくがあつた時に、おなじ横浜に早くから目をつけて来たが、茂木氏のような運を掴つかみ得ないで、国許くにもとに居るときよりは、一層せちがらい世を送っている者たちはこう言つた。

「とうとう本妻の罰があつたのだ。悪運も末になつて傾いて来たのだ。」

なるほど彼女はかなり深刻な悲惨な目を見たのである。彼女は王侯貴人にもまさる贅ぜいたく沢たくが身にしみてしまつていた。そして彼

女のはなはだしい道楽——彼女が生甲斐いきがいあるものとして、生きいるうちは一日も止めることの出来ないように思っていた、芸人を集めて、かるた遊びをしたり、弄花ろうかの慰なぐさみにふけることは、どうしてもやめなければならぬような病びょう気にかかっていた。長い間の酒色しゅしよく、放埒ほうらつのむくいからか、彼女の体は自由がきかなくなっていた。それでも彼女の奢おごりの癖は、吉原の老妓や、名古屋料理店の大升だいますの娘たちなどを、入びたりにさせ、機嫌をとらせていた。看護婦とでは、十人から十五人の人たちが、彼女の手足のかわりをして慰めていた。風呂に入る時などは幕を張り、屏びょう風ふうをめぐらし、そして静々しずしずと、ふくよかな羽根布団にくるまされて、室内を軽く迂すべる車で、それらの人々にはこぼせるのであつ



た。野沢屋の店が、この親子三人——彼女は祖母で、娘は未亡人となり、主人はまだ無妻であった——のために月々仕払う生活費は一万円であつたということである。無論たつた三人のために台所番頭という役廻りまであつて、その人たちは立派な一家をなし、中流以上の家計を営んでいたのである。

お上女中<sup>かみ</sup>、お下女中<sup>しも</sup>、三十人からの女中が一日、齷齪<sup>あくせく</sup>とすわる暇もなく、ざわざわしていた家である。台所もお上<sup>かみ</sup>の台所、お下<sup>しも</sup>の台どころとわかれ、器物などもそれぞれに應じて来客にも等差が非常にあつた。

彼女はそうした生活から、そうした放<sup>ほう</sup>縦<sup>しゅう</sup>の疲労から老衰を

早めた。おりもおり、さしもに誇りを持った横浜の土地から、或夜、ひそかに逃げださなければならなかった。彼女は幾台かの自動車に守られて、かねて東京へ来たおりの遊び場処にと、それもひいき鼻眞のあまりにかい取っておいた、赤坂仲の町の俳優尾上梅幸おのえばいこうの旧宅へと隠れた。

とはいえ彼女はさすがに苦勞をした女であり、また身にあまる榮華を尽したことをも悟っていたのか、家の退転については、あまり見苦しい態度はとらなかつたということである。病床にある彼女はすっかり諦めて、これが本来なのだ、もともと通りなのだどこと達観しているとも聞いたが、何処どこやらに非凡なところがある女という事が知れる。

そうした幸運の人々の中には現総理大臣 原 敬 氏の夫人もある。原氏の前夫人は中井桜洲氏の愛嬢で美人のきこえが高かつたが、放胆な家庭に人となつたので、有為の志をいだく青年の家庭をおさめる事は出来にくく離別になつたが、困らぬように内々面倒は見てやられるのだとも聞いていた。現夫人は、紅葉館の妓ひとだということである。丸顔なヒステリーだというほかは知らない。おなじ紅葉館の舞妓まいこで、栄さかえいみじい女は博文館主大橋新太郎氏夫人須磨子さんであろう。彼女は何の理由でか、家を捨て東京へ出て来ていたある旅館の若主人の、放浪中に生せた娘であつたが、舞踊にも秀ひいで、容貌は立並んで一際ひときわ美事みごとであつたため、若いうちに大橋氏の夫人として入れられた。八人の子を生ん

でも衰えぬ容色を持つている。越後から出てほんの一書肆しよしにすぎなかつた大橋氏は、いまでは経済界中枢の人物で、我国大実業家中の幾人かであろう。かたわ傍らに大橋図書館をひかえた宏荘の建物の中に住い、令嬢豊子さんは子爵金子氏令嗣れいしの新夫人となっている。よろずに思いたらぬことのない起伏おきふしであろう。明治の文豪尾崎紅葉氏の「金色夜叉こんじきやしや」は、巖谷小波氏いわやさざなみと須磨子夫人をとつたものと噂されたが、小波氏は博文館になくてならない人であり、童話の作家として先駆者である。氏にも美しく賢けんなる伴侶はんりよがある。

大橋夫人は美しかった故にそうした艶聞誤聞を多く持った。

長者とは——ただ富があるばかりの名称ではない。渋沢男爵こそ、長者の相をも人柄をも円満に具備した人だが、兼子夫人も若きおりは美人の名が高かった。彼女が渋沢氏の家の人となるときに涙ぐましい話がある。それは、なさぬ仲の先妻の子供があつたからのなんのとうのではない。深川油堀あぶらぼりの伊勢八という資産家の娘に生れた兼子の浮き沈みである。

油堀は問屋町で、伊勢八は伊東八兵衛という水戸侯の金子御きんすご用達たしであつた。伊勢屋八兵衛の名は、横浜に名高かつた天下の糸平と比べられて、米相場にも洋銀相場にも威をふるつたものであつた。兼子は十二人の子女の一人で、十八のおり江州ごうしゅうから婿むこを呼びむかえた。かくて十年、家付きの娘は気兼ねもなく、娘時

代と同様、物見遊山ものみゆざんに過していたが、傾かたむく時にはさしもの家も一  
 たまりもなく、僅わずかの手違てちがいから没落してしまった。婿になつた  
 人も子まであるに、近江おうみへ歸されてしまった。(そのころ明治十  
 三年ごろか?) 市中は大コレラが流行していて、いやが上にも没  
 落の人の心をふるえさせた。

彼女は逢あう人ごとに芸妓になりたいと頼んだのであつた「大好  
 きな芸妓になりたい」そういう言葉の裏には、どれほどの涙が秘  
 められていたであろう。すこしでも家のものに余裕を与えたいと  
 思うところと、身をくだすせつなさをかくして、きかぬ氣から、  
 「好きだからなりたい」といつて、きく人の心をいためない用心  
 をしてまで身金を金にかえようとしていた。両国のすしやという口く

入れ宿は、そうした事の世話をするからと頼んでくれたものがあった。すると口入宿では妾の口ではどうだといつて来た。

妾というのならばどうしても嫌だと、口入れを散々手古摺らした。零落れても氣位をおとさなかつた彼女は、渋沢家では夫人がコレラでなくなつて困っているからというので、後の事を引受けることになつて連れてゆかれた。その家が以前の我家——倒産した油堀の伊勢八のあとであろうとは——彼女は目くらめく心地で台所の敷居を踏んだ。

彼女はいま財界になくてならぬ大名士の、時めく男爵夫人である。飛鳥山の別荘に起臥しされているが、深川の本宅は、思出の多い、彼女の一生の振出しの家である。

## 三

さて明治のはじめに娼妓解放令の出た事を、当今の婦人は知らなければならぬ。それはやがて大流行になつた男女交際のさきがけをなしたもので、いわゆる明治十七、八年頃の鹿鳴館時代——華族も大臣も実業家も、令夫人令嬢同伴で、毎夜、夜を徹して舞踏に夢中になつた、西洋心酔時代の先驅をせんくをなしたものであつた。その頃吉原には、金瓶楼きんぺいろう今いま紫むらさきが名高い一人であつた。彼女は昔いにしえの太夫職たゆうしよくの誇りをとどめた才色兼美の女で、廢藩置県のころの諸侯を呼びよせたものである。山やま内の容うち堂ようどう侯は彼女に、そ



の頃としては実に珍らしい大形の立鏡たてかがみを贈られたりした。彼女は今様男舞いまようおとこまいを呼びものにしていた。緋の袴ひはかまに水干立烏帽子すいかんたてえぼし、ものめずらしいその扮装ふんそうは、彼女の技芸と相まってその名を高からしめた。明治廿四年依田学海翁よだがくかいが、男女混合の演劇をくわだてた時に、彼女は千歳米坡ちとせべいや、市川九女八いちかわくめはちの守住月華もりずみげつかと共に女軍じよぐんとして活動を共にしようとして馳せ参じた。その後も地方を今紫の名を売物にして、若い頃の男舞いを持ち廻っていた様であった。一頃ひところは、根岸に待合めいたこともしていた。晩年に夫としていたのは、彼の相馬事件——子爵相馬家のお家騒動で、腹違いの兄弟の家督争いであった。兄の誠胤せいいんとよばれた子爵が幽閉され狂人とされていたのを、旧臣錦織剛清にしごおりごうせいが助けだした——の

錦織剛清であつた。

遊女に今紫があれば芸妓に芳町よしちようの米八よねはちがあつた。後に千

歳米坡と名乗つて舞台にも出れば、寄席よせにも出て投節なげぶしなどを唄

つていた。彼女はじきに乱髪らんぱつになる癖があつた。席亭せきていに出て

も鉢巻のようなものをして自慢の髪を——ある折はばらりと肩ぐ

らいで切つていている事もあつた。彼女が米八の昔は、時の人からた

つた二人の俊髦しゆんもうとして許された男——末松謙澄すえまつけんちようと光明こうみやう

寺三郎うじざぶろう——いづれをとろうと思ひ迷つたほど、思上つた氣位で、

引手あまたであつた。とうとうその一人の光明寺三郎夫人となつ

たが、天は、その能ある才人に寿じゆをかさず、企図は総て空しいも

のとされてしまった。彼女はその後、浮世を真つすぐに送る氣を

なくしてしまつて、斗酒としゆをあおつて席亭で小唄をうたいながら、いつまでも鏡を見てくらす生涯を送るようになった。しかし伝でんぼ法うな、負けすぎらいな彼女も寄る年波には争われぬ。ある夜、そとほりせん外堀線の電車へのつた時に、美女ではあるが、何処やら年齢のつろくせぬ不思議な女が乗合わせた、と顔を見合わした時に、彼女はそれと察してかクルリと後をむいて、かなり長い間を立つたままであつた。席はむしろすきすきだったのであつたが、彼女は正体を見あらわされるのを厭きらつたに違ちがひなかつた。艶やかに房やかな黒髪は、巧妙にしつらわれた鬘かつらなのは、額でしれた。そして悲しいことに、釣り革をにぎる手の甲に、年としかず数はかくすことが出来ないでいた。

女役者として巍然ぎぜんと男優をも撞どう着ちやくせしめた技量をもつて、

小さくとも三崎座に同志を糾きゆう合ごうし、後にはある一派の新劇に

文士劇に、なくてはならないお師匠番として、女団洲の名を辱はずしめ

なかつた市川九女八いちかわくめはち——前名岩井いわいくめはち八はち——があり、また新宿

豊倉楼とよくらうの遊女であつて、後の横浜富貴楼ふつきらうの女将おかみとなり、明治

の功臣の誰れ彼れを友達づきあいにして、種々な画策に預つたお

倉じよけつという女傑じよけつがある。お倉は新宿にいるうちに、有名な堀の芸

者小万と男をあらそい、美事にその男とそいとげたのである。彼

女は養女を多く仕立て、時の頭官に結びつくよすがとした、雲うんで

梯いはやしたかめたらう 林田亀太郎氏——粹翰すいかんちよう長として知られた、内閣書記翰

長もまたお倉の女婿じよせいである。お倉は老ても身だしなみのよい女

であつて、老年になつても顔は艶々としていた。切髪のなでつけひふすがた被布姿で、着物の裾すそを長くひいてどこの後室こうしつかという容体であつた。

ゆうめいろう

有明楼のお菊は、

しろはかた

白博多のお菊というほど白博多が好きで

名が通つていた。それよりもまた、その頃の人気俳優さわむらそうじ沢村宗

ゆうろう

すけたかやたかすけ

十郎――

助高屋高助――

を夫にむかえたのと、宗十郎が舞台

で扮する女形おやまはお菊の好みそのままであつたので殊ことさら更名高かつ

た。ことに宗十郎の実弟には、評判の高い田之助たのすけがあつたし、有

明楼は文人画伯の多く出入でいりした家でもあつたので、お菊はかなり

な人気ものであつた。待乳山まっちやまを背にして今戸橋いまどばしのたもと、竹

屋の渡しを、山谷堀さんやぼりをへだてたとなりにして、墨堤ぼくていの言問こととい

を、三みめぐり圍神社の鳥居の頭を、向岸に見わたす広い一ひとかまえ構が、  
 評判の旗亭きてい有明楼であつた。いま息子の宗十郎が住すまつてゐる家は、  
 あの広さでも、以前の有明楼の、四分の一の構えだということ  
 ある。

此処に若いころは吉原の鴿鳥におとりおいらん花魁であつて、田之助と浮名  
 を流し、互いにせかれて、逢われぬ雪の日、他の客の脱捨ぬぎすてた衣  
 服大小を、櫛れんじそと子外に待つてゐる男のところへともたせてやつて、  
 上にはおらせ、やつと引き入いれさせたという情話をもち、待合「氣  
 樂の女将」として、花柳界にピリリとさせたお金きんの名も、洩もらすこ  
 とは出来まい。この女も、明治時代の裏面の情史、暗黒史をかく  
 には必ず出て来なければならぬ女であつた。

清元きよもとお葉ようは名人たへえ太兵衛の娘で、ただに清元節の名人で、夫延えん
 寿しゅ太夫たゆうを引立て、養子延寿太夫を薫陶したばかりでなく、彼女
 も忘れてならない一人である。京都老妓なかにしきみお中西君尾は、その晩年
 こそ、貰いあつめた黄金を、円かたまりき塊とこにして床に安置したような、
 利殖儉約な京都女にすぎないように見えたが、維新前こくじかんの国事艱
 難なんなおりには、憂国の志士を助けて、義侠を知られたものであ
 る。井上侯がまだ聞太もんたといつた侍のころ深く相愛して、彼女の魂
 として井上氏の懐に預けておいた手鏡——青銅の——ために、井
 上氏は危きく凶きよう刃じんをまぬかれたこともあつた。彼女は桂小五郎
 の幾いく松まつ——木戸氏夫人となつた——とともに、勤王党の京都女
 を代表する美人の幾人かのうちである。

歌人松の門三艸子も数奇な運命をもっていた。八十歳近く、半身不随になつて、妹の陋屋ろうおくでみまかつた。その年まで、不思議と弟子をもつていて人に忘れられなかつた女である。その経歴が芸妓となつたり、妾となつたりした仇者あだものであつたために、多くそうした仲間の、打解けやすい気易さから、花柳界から弟子が集つた。彼女は顔の通りに手跡しゆせきも美しかつた。彼女の絶筆となつたのはたつみやの襖ふすまのちらし書であろう。その辰巳屋のお雛ひなさんも神田で生れて、吉原の引手茶屋桐佐きりさの養女となり、日本橋区中洲かすの旗亭辰巳屋おひなとなり、豪極ごうきにきこえた時の頭官山田〇〇伯を掴つかみ、一転竹柏園ちくはくえんの女歌人となり、バイブルに親しむ聖徒となり、再転、川上貞奴さだやつこの「女優養成所」の監督となつて、



劇術研究に渡米し、米國ボストンで客死したとき、財産の全部ともいうほどを、昔日の恋人に残した佳話の持主で、書残されない女である。

三艸子みさこの妹もうつくしい人であつたが、尾上おのえいろともいい、荻お野八重ぎのやえぎり桐とも名乗つて年をとつてからも、踊の師匠をして、本所

のはずれにしがな暮しをしていた。この姉妹が盛りのころは、

深川の芸者で姉は小川屋の小三こさんといい、または八丁堀やぐらした櫓うら下の

芸者となり、そのほかさまさまの生活をして、好き自由な日を暮

しながら歌人としても相当に認められ、井上いのおえふみお文雄まつから松の門との

名を許され、文人墨客の間を縫うて、彼女の名は喧けん伝でんされたの

であつた。その頃は芸者が意気なつくりをよろこんで、素足すあしの心

意気の時分に、彼女は厚化粧あつげしようで、派手やかな、人目を驚かす扮飾おんしやくをしていた。山内侯に見染められたのも、水戸の武田耕雲齋たけだこうんさいに思込まれて、隅田川の舟へ連れ出して白刃はくじんをぬいて挑まれたいどのも、みな彼女の若き日の夢のあとである。彼女たちは幕府のころ、上野の宮の御用達をつとめた家の愛娘であつた。下谷したや一番の伊達者だてしや——その唄は彼女の娘時代にあてはめる事が出来る。店が零落してから、ある大名の妾となつたともいうが、いかに成行なりゆこなりゆうかも知らぬ娘に、天から与えられた美貌と才能は何よりも恵みであつた。彼女は才能によつて身をたてようとした。そして八丁堀茅場町かやばちようの国文の大家、井上文雄の内弟子うちでしになつた。彼女たちは内弟子という、また他のものは妾だともいう。しかし妾とい

うのは、その頃はまだ濁りにそまない、あまり美しすぎる娘時代であつたので、とかく美貌のものがうける妬みねたであつたらうと思われるが、後にはあまり素行の方では評判がよくなかつた。

## 四

我国女流教育家の泰斗たいととしての下田歌子女史は、別の機会に残して夙つとに後の宮の御見出しにあずかり、歌子の名を御下命になつたのは女史の十六歳の時だというが、総角あげまきのころから国漢文をよくして父君を驚かせた才女である。中年の女盛りには美人としての評が高く、洋行中にも伊藤公爵との艶名艶罪かまびすが囂さわしかつた。

古い頃の自由党副総理 なかじまのぶゆき 中島信行男の夫人 しやうえん 湘煙女史は、長く肺患のため大磯にかくれずんで、世の耳目じもくに遠ざかり、信行男にもおかれて死なれたために、あまりその晩年は知られなかつたが、彼女は京都に生れ、岸田俊子といつた。年少のころ宮中に召された才媛の一人で、ことに美貌な女であつた。この女はひと覇氣はきあるために長く宮中におられず、宮内を出ると民権自由を絶叫し、自由党にはいつて女政治家となり、盛んに各地を遊ゆうぜい説し、チャームिंगな姿体と、熱烈な男女同権、女権拡張の説をもち、十七八の花の盛りの令嬢が、しまだまげ 島田鬻まげで、きはちじよう 黄八丈の振袖で演壇にたつて自由党の箱入り娘とよばれた。さびしい晩年には小説に筆を染められようとしたが、それも病のためにはかばかしからず、母

堂みとに看みられてこの世を去つた。

女性によつて開拓された宗教——まいすぞくそ売僧俗僧の多くが仮面をか

ぶりきれなかつた時において、女流に一派の始祖を出したのは、

天理教といわず おおもときよう大本教といわず、いづれにしても異なる事であつた。

その中で皇族の身をもつて始終精神堅固に、仏教によつ

て民心をなごめられた村雲むらくもにこう尼公は、玉を磨いたような容貌おかおであつた。

温和と、慈悲と、せいれい清麗とは、似るものもなく典雅玲瓏てんがれいろう

として見受けられた。紫の衣に、菊花を金糸に縫いたる緋の輪袈わけ

裟さ、御よそおいのとのうたあでやかさは、その頃美しいもの

譬たとえにひいた福助——中村歌右衛門の若盛り——と、松島屋——

現今の片岡かたおかがどう我童の父で人氣のあつた美貌びぼうの立役たちやく——を一緒に

したようなお貌かおだとひそかにいいあっていたのを聞覚えていた。  
また、予言者と称した「神しん生せい教きょう壇だん」の宮崎虎之助氏夫人光子は、上野公園の樹じゆ下かせ石せき上じょうを講壇として、路傍の群集に説教し、死に至るまで道のために尽し、諸国を伝道し廻り、迷える者に福音をもたらししていたが、病い重しと知るや一層活動をつづけてついに終りを早うした。その遺骨は青森県の十和田湖畔の自然岩の下に葬られている。強い信仰と理性とに引きしまった彼女の顔容は、おごそかなほど美しかった。彼女は夫と並んで、その背には一人子の照子を背負っていた。そしていつも貧しい人の群れにまじって歩いていた。ある時は月島の長屋住居をし、ある時は一膳めしやに一食をとっていた。栗色の大理石マーブルで彫ったようなのが彼

女であつた。

宗教家ではないが、愛国婦人会の建設者奥村おくむらいおこ五百子も立派な容貌をもつていた。彼女が会を設立した意味は今日ほど無意義なものではなかつた。彼女は幼いころから愛国の士と交わつていたので、彼女の血は愛国の熱に燃えていたのである。彼女は尋常つぐし一様の家婦としてはすごされないほど骨がありすぎた。彼女は筑紫つくしの千代の松原近き寺院の娘に生れたが、父は近衛公の血をひいて、父兄ともに愛国の士であつたゆえ、彼女も幼時から女らしいことを好まず、危い使いなどをしたりした。しかし一たん彼女は夫を迎えると、貞淑温良な、忠実な妻であつた。彼女の夫は煎せんち茶やを売りにゆくに河を渡つて、あやまって売ものを濡ぬらしてしま

うと、山の中にはいつて終日、茶を乾ほしながら書籍を読みふけていて、やくにたたなくなつた茶がらを背負つて、一銭もなしで家に帰つて来たりした。彼女は四人の子供を抱えて、そうした夫につかえるために貧苦をなめつくした。ある時は行商となり、ある時は車をおしてもものを商あきない、ある時は夫の郷里にゆく旅費がなく、門附かどづけをしながら三味線をひいて歩いたこともあつた。晩年にやや志こころざし望ぞうを遂げるようになって、すこしも心の紐ひもはゆるめず、朝鮮に、支那に、出征兵士をねぎらつて、肺患おもの重るのを知りながら、薬瓶をさげて往来していた。



高橋おでんも、蝮まむしのお政も、偶々たまたま悪い素質をうけて生れて来たが、彼女たちもまた美人であつた。おでんもお政も悪こうが嵩こじて、盗みから人殺しまでする羽目になつた。それにくらべては、花井お梅は思いがけなく人を殺してしまつたので、獄裡ごくりに長くつながられたとはいへ、それを囚人あつかいにし、出獄してから後も、囚人であつた事を売物見世物みせもののようにして、舞台にさらしたり、寄席せに出したりしたのはあんまり無惨むざんすぎる。社会は冷酷すぎる。彼女は新橋で売れた芸者であつたが、日本橋区の浜町河岸はまちようがしに「酔月すいげつ」という料理店をだした。そうした家業には不似合な、あんまり堅気な父親をもつていて、恋には一本気な彼女を抑圧し

すぎた。我<sup>わがまま</sup>儘で、勝気で、売れっ児で通して来た驕<sup>きょうまん</sup>慢な女が、お酒のたちの悪い上に、ヒステリックになつていた時、心がけのよくない厭味<sup>いやみ</sup>な箱屋に、出過ぎた失礼なことをされては、前後無差別になつてしまつたのに同情出来る。彼女は自分の意識しないで犯した大罪を知ると直<sup>すぐ</sup>に、いさぎよく自首して出た。獄裡にあつても謹慎<sup>きんしん</sup>していたが、強度のヒステリーのために、夜々<sup>よよ</sup>殺したものに責められるように感じて、その命日になると、ことに気が荒くなつていたということであつた。幾度かの恩赦<sup>おんしや</sup>によつて、再び日の光を仰ぐ身となつたが、薄幸のうちに死んでしまつた。

## 六

ささや桃吉ももきち、春本万竜はるもとまんりゆう、照近江お鯉てるおうみこい、富田屋八千代とみたややちよ、  
 川勝歌蝶かわかつかちよう、富菊とみぎく、などは三都歌妓の代表として最も擢ぬきんでてい  
 る女たちであろう。そして一人、忘れる事の出来ないのは新橋  
 のぼんた——鹿島恵津子夫人かじまえつこのある事である。

桃吉の「笹屋」は妓名の時の屋号ではない。笹屋の名は公爵い岩  
 倉具張氏わくらともはりと共棲ともずみのころ、有楽橋ゆうらくばしの角に開いた三階づくり  
 のカフェーの屋号で、公爵きよくの定紋じようもん笹竜胆ささりんどうからとつた名だと  
 いわれている。桃吉はお鯉の照近江に居たのである。照近江から  
 初代お鯉が桂公ちようしよの寵妾ちようしよとなり、二代目お鯉が西園寺侯爵の寵

愛となつた。二代つづいて時の総理大臣侯爵に思われたので、桃吉も発奮したのであろう、彼女は岩倉公を彼女ならではならぬものにしてしまった。そして大勢の子のある美しい桜子夫人との仲をへだてて館やかたを出るようになされた。そして二人は、桃ももき吉御殿ちごてんとよばれたほど豪華な住居をつくつて住んだりした果が、負債のために稼がなければならぬという口実で、彼女が厭あきていた内裏だいりびな雑生活から、多くの異性に接触しやすい、もとの家業に近い店をだしたのであつた。彼女は笹屋の主人となり、ダイヤモンドをイルミネーションのように飾りたてて、幾十万円かの資産を有していたというに、あわれにも公爵家は百余万円の浪費のために、公爵母堂は実家へ引きとられなければならないというほ

どになり、館やかたは鬼の高利貸の手に処分されるようになり、若くて  
 有為ゆういの身を、笹屋の二階の老隠居と具張氏はなつてしまった。桃  
 吉が資産家になり、権力が加くわつてゆくと共に、今は爵位を子息に  
 ゆずつて、無位無官の身となつた具張氏は居いづら愁い身となつてしま  
 った。やがて二人の間に破滅の末の日が来て、具張氏は寂しい姿  
 で、桜子夫人の許もとにと歸つていった。ささやの三階から立ち出た  
 人には、あまり天日てんぴが赫々かくかくとあからさますぎた事であろう。九き  
 尾ゆうびの狐玉藻きつねまもの前まえが飛去つたあのような、空虚な、浅間しき、  
 世の中が急に明るすぎるように思われたでもあろう。その桃吉は  
 甲州に生れ、旅役者の子だというが、養われたさきは日本橋の魚  
 河岸だつたという事である。

ほんたは貞節の名高く、当時大阪の人にいわせると、日本には、

富士山と、がんじろう鷹次郎（大阪俳優中村）と、八千代があるといった。

富田屋八千代はすが菅画伯の良妻となり、一万円とよばれた赤坂春本

の万竜もしゆくが淑雅な学士夫人となっている。祇園の歌蝶は憲政芸妓

として知られ、選挙違反ですこしの間罪つみせられ、禅門に参堂し、

富菊は本願寺句くぶつしようにん仏上人を得度して美女の名が高い。

よしちよう芳町の奴とやっこ嬌名きようめい高かつた妓は、かわかみおとじろう川上音次郎の妻とな

つて、新女優の始祖マダムさだやっこ貞奴として、我国でよりも欧米各

国にその名をけんてん喧伝された。いまはふくざわももすけ福沢桃介氏の後援を得て

名古屋に綿糸工場を持ち、女社長として東京にも名古屋にも堂々

たる邸宅を控え、日常のおこないは工場を監督にゆくのと毛糸編

物とを専らにしている。貞奴の後に、彼地で日本女性の名声を芸壇にひびかしているのは歌劇の柴田環女史オペラ しばたたまきであろう。この人々は日本を遠く去つてその名声を高めたが、海外へは終ついに出なかつたが、新女優の第一人者として松井須磨子のあつた事も特筆しなければなるまい。彼女は恩師であり情人であつた島村抱月氏しまむらほうげつに死別した後、はじめて生と愛の尊さを知り、カルメンに扮した四日目の夜に縊くびれ死んだのであつた。

それにくらべれば魔術師の天勝てんかつは、さびしいかな天勝といいたい。彼女はいつまでも妖艶に、いつまでもおなじような事を繰返している。彼女の悲哀は彼女のみが知るであろう。

豊竹呂昇とよたけろしやう、竹本綾之助たけもとあやのすけの二人は、呂昇の全盛はあとで、

綾之助は早かった。ゆくとして可ならざるなき才女として江木欣えぎきん々夫人の名がやや忘れかけると、おなじく博士夫人で大阪の高安やす子夫人の名が伝えられ、蛇夫人とよばれた日向きん子女史は、あまりに持合わせた才のため、かえって行く道に迷っていられたようであったが、林きん子として、舞踊家となった。

九条武子、伊藤燁子いとうあきこは、大正の美人伝へおくらなければなるまい。書洩かきもちしてならない人に、樋口一葉女史、田沢稲舟女史たざわいなぶね、大塚楠緒子女史があるが余り長くなるから後日に譲ろうと思う。

——大正十年十月『解放』明治文化の研究特別号所載——

附記 樋口一葉女史・大塚楠緒子女史・富田屋八千代・歌蝶



・豊竹呂昇は病死し、田沢稻舟女史は毒薬を服し、松井須磨子・江木欣々夫人は縊くびれて死に、今や空し。



# 青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「解放 明治文化の研究特別号」

1921（大正10）年10月

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 明治美人伝

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>